

特集地球文明への視点

Theme: Viewpoints about Global Civilization

対談

新たな文明の創造を目指して―現代社会の抱える課題

佐和隆光十川田洋一

司会・山本修一

山本 きょうは、お忙しいところをありがとうございます。

現在は二十世紀の終わり、「第三ミレニアム」の入り口であって、歴史的な節目として重要な時代に入っております。その歴史の節目にふさわしく、極めて大きく、また複雑な地球的問題群とでも言うべき問題が噴出してきております。

今世紀を総括して、フランシス・フクヤマが「歴史の

終わり」と言ったのに対して、佐和先生は『地球文明の条件』（岩波書店、一九九五年）の中では、むしろ「歴史の始まり」である、とおっしゃっています。この「歴史の始まり」という意味は、一つは、ファシズム、共産主義が終わり、民族、宗教、文化の差異が顕在化する時代になったということ。もう一つは、二十世紀型の工業文明が終わり、二十一世紀型の文明が始まるということですね。この二つの観点で、「歴史が始まる」とおっしゃ

っていると思います。第一の観点はここではさて置くとして、第二の観点を中心に話合ってくださいと思います。

初めに、佐和先生から戦後日本の経済状況をまとめていただき、そこにおける問題点を提出していただくところから、この対談を始めたいと思います。

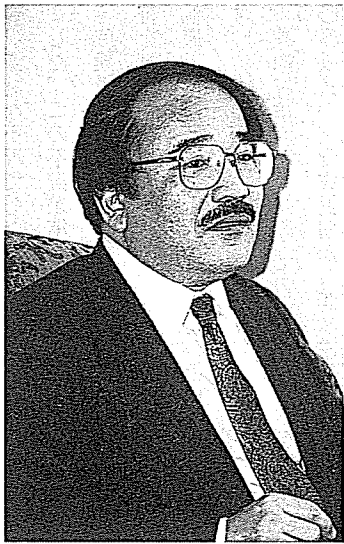
日本経済の歴史と転換点

佐和 ちょっと唐突かもしれませんが、「平成不況」というのが一九九一年五月に始まって、九三年十月に終わりました。私は、この平成不況を戦後日本経済の第三の

転換点だと見ています。

第一の転換点は、一九五七年から五八年にかけての「鍋底不況」の時だと思います。この時は何をどう転換させたのかと言いますと、戦後復興期にギリオドを打って高度成長期の幕を切って落とした。そういう転換点だったのです。

第二の転換点は、「オイル・ショック不況」です。これは、一九七三年十月に石油の値段が一挙に四倍に上がった。この時、日本は高度成長期の絶頂期でしたが、そこに冷水を浴びせられた。そして、七三年十二月に景気は下降局面に入ってオイル・ショック不況。これは、大



佐和隆光氏

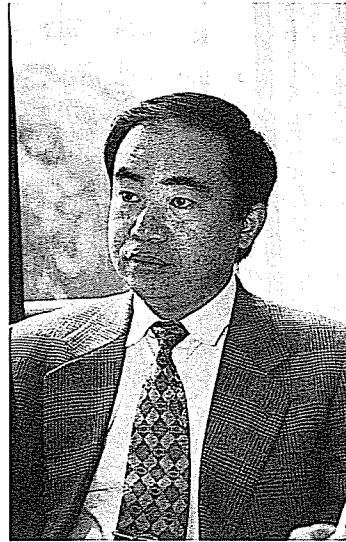


川田洋一氏

変、深刻な不況でしたが、七五年三月に何とか底入れしました。この不況が第二の転換点です。これは、何をどう転換させたのかと言いますと、高度経済成長期に終止符を打ったわけです。その後どうなったか。減速経済の軌道上に何とか軟着陸を遂げた、という感じだったのです。

減速経済とは、数字で言いますと、経済成長率が一〇%成長の高度成長期から四%成長の時代に入ったという事です。私は、この減速経済期とは一九九〇年で終わったと見ています。そして、九一年から平成不況でほぼ三年間の不況。これが第三の転換点だと最初に申し上げましたが、これを経た後、日本経済はいよいよ成熟化段階に入ったと見ています。

成熟化段階とは一体何なのか。例えて言いますと、戦後五十年間、工業化社会の階段を我々は息せき切って駆け上ってきました。そして、階段の踊り場に到達した。この階段の踊り場が、他でもない成熟化段階です。そして、階段の踊り場ですから、さらに、その向こうにもう一つの階段があるはずです。そのもう一つの階段が、ポ



山本修一氏

間が手に入れたからです。考えてみますと、二十世紀に登場した飛行機であれ、自動車であれ、あるいは様々な電化製品すべて、電気が石油製品をエネルギー源に使っています。その意味で、まさに「二十世紀は石油の世紀、電力の世紀」と言うことも出来るかと思っています。

しかし、そのことはとりもなおさず、電力をつくるにせよ、あるいは石油で飛行機や自動車が動くにせよ、すべて二酸化炭素が発生するわけですね。したがって、「二酸化炭素排出の世紀であった」と言うことも出来ます。

スト工業化社会だと思っています。

したがって、階段の踊り場にいる間に、いろいろな日本型システムのあれやこれを編み変えてみることです。ここで改編しないことには、下手をすると二十一世紀を通じてずっと階段の踊り場に佇んでいなくてはいいない事態にもなりかねないと思います。

山本 なるほど、では、現在の文明という観点から二十世紀を振り返っていただくと、どういう特徴があることになりますか。

佐和 それは、いろいろな答え方がありますが、経済成長の世紀であった。では、どうしてそんなに経済成長したのかと言うと、実は数限りないイノベーションが次から次に、技術化の進歩が次から次に向上した。その意味で、「技術革新の世紀だ」と言うこともできると思います。

では、どうして二十世紀になって、こんなに技術革新が次から次へと成し遂げられたのか。もっと具体的に言えば、新製品が次から次に登場したのかと言うと、実は十九世紀末に石油と電力という二つのエネルギー源を人

二十世紀型工業文明への挑戦

山本 先生は、二十世紀型工業文明の病理を『地球文明の条件』では「トリレンマ」、すなわちエネルギー、環境、経済成長の問題として表現されていますが、二酸化炭素による地球の温暖化問題にトリレンマが集約されているように思います。

佐和 その二酸化炭素の地球温暖化効果は、既に十九世紀末に知られていたのです。ところが、二酸化炭素に地球温暖化効果があるからこそ地球の温度は、例えば、昼夜の温度差がそれほど大きくなくて生物が快適に地球上で住むことが出来ると、むしろ、ポジティブにその効果がとらえられていたのです。ですから、大気中の二酸化炭素の濃度がここまで高まって、結果的に地球が温暖化し、脅威にさらされるようになるとは、誰も予想もしなかったことなんですね。

ところが、一九七九年から九六年の十八年間にわたって異常高温が続いているのです。異常高温とは、WMO（世界気象機関）の定義によると、「三十年に一度しか起

「こらない高温」ということです。それから、それが、とにかく十八年間も続いている。これは、少なくとも自然現象とは言い難いことです。そして、温暖化が問題にされるようになりました。

この地球温暖化問題は、まさに二十世紀型工業文明そのものの問い直しを、私たちに迫っていると思います。では、二十世紀型工業文明とは何なのかと言うと、これは大量生産、大量消費、大量廃棄の文明だと言えるのではないのでしょうか。地球温暖化問題は、文明の問い直しを我々に迫るという意味で、まさに二十世紀型工業文明に対する挑戦という意味で、これは大変な問題だと言えるのではないかと思います。

川田 しかし、大量生産、大量消費、大量廃棄こそ、先ほど言われた経済成長を支えるメカニズムの一つですね。

山本 そこで、私はいつも、経済というのは一体成長し続けなければいけないものなのかどうか、疑問に思うのです。

佐和 そうなんです。もともと経済は成長しなくては

けないのか。では、その経済の成長は何で計るのかと言うと、国民総生産、あるいは国内総生産という、人間が勝手につくった一つの量ですが、その量の成長で計るわけです。

では一体、国内総生産とは何なのかと言うと、国内で一年間に生産されたと言うと語弊がありますが、生産された付加価値の総和というわけです。付加価値の総和とは、言い換えれば所得の総和のことです。ですから、その意味で所得の総和が大きくなるのは結構なことではないか、豊かさの物差しとしては大変適切だということになるわけです。そして人口が増えている状況のもとでは、やはり所得が増えていく。少なくとも、一人当たりの所得が減っては困るというのは、もっともなことだと思います。

しかし問題は、例えば、戦後の日本経済の成長を振り返ってみると、さきほど、「二十世紀型工業文明は大量生産、大量消費、大量廃棄だ」と言いましたが、実は大量生産、大量消費の文明というのは、一九一〇年代から二〇年代にかけてアメリカで形づくられた文明なんで

す。その下に、「大量廃棄」の四文字をくつつけたのは、戦後の日本ではなかったかと思っています。

例えば、ヨーロッパに行きますとパリでも、ロンドンにしても、百年前、二百年前の建物に依然として人が住んでいます。もちろん、それは建築の構造的な問題もあります。戦後、日本で造られた鉄筋コンクリートのビルの寿命は三十数年だと言うんですね。そんなに建物の寿命が短い国は、世界中捜しても日本だけです。

それから事務用の機器でも、次から次へと新製品が出る。とにかく寿命が非常に短い。どうも使い捨てを制度化したのは戦後の日本ではないかという気がします。

だからこそ、実は経済成長したんだとなるわけですね。例えば、ヨーロッパの建造物のように、いったん造ると、百年、二百年もつのは当たり前で、日本のように、三十年に一回、建て替える国と比べると、後者の方が経済成長率が高いのは当然のことです。

実際に、日本の国ではいま現在、六百八十万人ものが建設業界で働いている。六百八十万人とすると、実は、日本の総就業者の総数が六千三百万人余りです

ら、十人に一人以上が建設業界のお世話になっていることになります。どうして建設業界がそれだけたくさんの人を世話出来るのかと言いますと、要するに、それだけの所得を生み出しているからです。これは公共事業の大判振る舞い、それから建造物の寿命が短いということに尽きるのです。

ですから、建物を一つ造れば、百年、二百年もつのが当たり前で、日本のように建造物の建て替えをしょっちゅうやる国では、後者の方が国民総生産、GNPが大きくなるのは当然です。だからと言ってより豊かな国かと言うと、首をかしげざるを得ませんね。ですから、GNPが豊かさの物差しとしては大変偏っていることは、確認しておく必要があると思います。

山本 問題点を分かりやすくまとめていただきました。ありがとうございます。そうしますと、現在は、経済学的には、大量生産、大量消費、大量廃棄が特徴である二十世紀型工業文明からポスト工業文明への転換点であるということ。そして問題はトリレンマとして現れているものの、その中の経済成長は豊かな社会を築くためには必

定のものであり、その指標がGNPであった。GNPは豊かさの指標としては偏ったものであるが、GNPを目標としたために、大量生産、大量消費、大量廃棄が必要であったということですね。

日本の特徴としての大量廃棄と無宗教

山本 さて、大量廃棄を付け加えたのは、日本であるとの指摘ですが、これは日本のどのような特徴に基づくのでしょうか。

川田 日本が、大量消費から大量廃棄の社会になってきたのは、これはやはり、日本の民族性の問題ではありませんか。

佐和 いやあ、どうなんですか。もともと日本人には、「もったいない」とかいう意識があったはずなんです。

川田 そうなんですよ。それが、すっかりなくなりました。

佐和 なぜなんですかね（笑い）。

川田 日本は、東洋文明の一つとして自然との共存の生

スト教、仏教の三つを適宜使い分けている。こういう国は、世界広しと言えども恐らく日本人だけだと思います。とにかく、宗教がないのですから。

その宗教がないにもかかわらず、なぜか、日本人はまとまりがあります。ある種、何かしらアイデンティティーのようなものがある。一体、何がアイデンティティーなのか、何が「核」だったのかと追究してみますと、戦前は紛れもなく天皇制がアイデンティティーのコアでした。丸山真男流に言えば、「国体」です。ところが、戦後、象徴天皇制になったこともあって、天皇制はもはや日本人のアイデンティティーの核の役割を果たし得なくなりました。それに代わって、アイデンティティーの核になったのは何だったかと考えてみますと、私が思い当たるのは、やはり、欧米諸国に「追い付き追い越せ」だったんですね。

では、何で追い付き、追い越すのかと言えば、GNPの大きさと「追い付き追い越せ」。とにかく、戦後、日本人が共通して抱く目標というのは、結局、「追い付き追い越せ」だったのです。

活をずっと形づくってきたはずなんです。ところが現在、いつも問題になるのは、どうして、自然破壊の進行に対する有効な歯止めが出来ないのかという点と、いまおっしゃった、もったいないというような、そういう倫理的なものが急速に崩壊していることですね。

佐和 それは、二つ理由があると思います。一つは、最近よく言われていますが、日本は無宗教国だということです。サミュエル・ハンチントンというアメリカの政治学者が、いまから三年ほど前に、『文明の衝突』という論文を書いて大変話題になりました。

言っていることの当否はさて置くとして、この中で彼は世界の文明圏を西洋のキリスト教文明圏、スラブ正教文明圏、イスラム文明圏、インド・ヒンズー文明圏、儒教文明圏、そして日本文明圏の六つの文明圏に分けています。この中で日本にだけ、宗教が付いていないのです。

確かに大方の人が、子供の七五三とか、地鎮祭は神道でやる。結婚式は神道かキリスト教で行う。そして、その同じ人が葬式は仏教で出すということで、神道、キリ

それで、「追い付き追い越せ」と一生懸命に励むうちに、そうした礼節を忘れると言うのでしょうか、もったいないといった精神は、追い付き、追い越すためには、むしろ、よい倫理観であるとして、そういうものは全部かなぐり捨ててきたことが一つ。

もう一つは、工業化のスピードが欧米諸国の場合は百年、あるいは百五十年もかかっているのに、日本は五十年間ぐらいで極めて傾斜の急な工業化を推し進めたこと。これが、もう一つの理由だと思っています。

川田 いま先生のおっしゃった無宗教というのは、実は私たちがいつも言っていることと全く同じです。確かに日本は外から見ると仏教国に見えるようです。大乘仏教の国である。だけど現在では、仏教が培うはずの倫理性が全く失われていると言うか、そういう国になってしまった。

そうした点で考えていくと、キリスト教圏とかイスラム圏などは、宗教に基づく倫理的な規制が効いています。ところが、日本ではその規制が効かない。と言うことは、これが逆に、無制限な欲望の解放を刺激して、経

済成長を高める要因になったのかなという気がします。佐和 そうですね。それともう一つは、集団主義ですね。ジャン・ボードリアールというフランスの社会学者が、一昨年、日本に来て朝日新聞のインタビューに答えて、大変興味深いことを言っています。

それは、「私は日本に初めて来た。日本のことはあまりよく知らないから見当外れのことを言うかもしれないけれども」と断った上で、次のように言っています。

「日本という国が豊かなのは、日本人が貧しいせいじゃありませんか」と。「日本という国が豊かなのは」と言うのは、一九九五年に日本は一人当たりのGNPが世界一になったことを指しています。つまり、日本が一人当たりGNPで世界一になったのは、日本人の貧しい生活の犠牲の上に成り立っている、と言いたいのでしょう。東京のサラリーマンの生活をボードリアールが見れば、「何と貧しい生活を」と思うに決まっています。

片道一時間ないし一時間半、満員電車に乗っての長時間通勤、それから長時間労働、そして深夜に帰宅。しかも、家族四人で二DKか、三DKの小さい家に住んでい

る。これは、欧米の感覚からすれば実に貧しい生活です。そういう貧しい生活に、誰も文句を言わずに一生懸命、「追い付き追い越せ」で励んできた。だから、日本は世界一豊かな国になった。

さらにボードリアールは、次のようなことを言っています。「我々ヨーロッパの人間の感覚からすれば、国民の一人一人が豊かになって初めて国が豊かになるはずなんです。どうも、日本には違うモデルがあるようですね」と。全くその通りだと思います。

山本 日本の場合には手段だけがどんどん先行して、その手段の先に大きな目標と言いますか、人間の生き方として本当の豊かなものとは何か、あるいは本当の理想像が何か、というようなものがなくて、ただ単に「追い付き追い越せ」だけでやってきた。

佐和 そうですね。その時の物差しがGNPであった。そして、そのGNPを大きくすることが、これ、すなわち豊かになることである、と単純に、そう信じ込んだんです。そうすると、例えば、建物を造っては壊し、壊しては造る。この大量廃棄もいいことではないか、なぜ

ならば、GNPの拡大に寄与するからだ。まあ、そこまでははっきり言わないでしようけれども。

宗教の役割としての倫理

山本 日本は無宗教だということですが、宗教のもつ役割についてはどのように考えていらつしやいますか。

川田 キリスト教圏に行っても、また、イスラム教圏でも宗教の立場からの問題提示がされていますが、現代物質文明のマイナス面に歯止めをかけ、人間の本当の生き方と、本来的生のあり方を提示していくのが宗教の立場ですね。

当然、「宗教的なもの」の関与には、プラスの面とマイナスの面との両面を考えなければなりません。それにしても、物質至上主義ではなく精神的なものとか、環境との関係性とかの考慮の上に、本当の人間の豊さがあり、生き方があるという、そういう生き方論みたいなものを提示していくのが宗教です。その点では、ヨーロッパではともかくキリスト教が生きているなという感じがしますね。

佐和 ええ。川田 キリスト教圏やイスラム教圏においても、現代物質文明、特に、科学の進歩との間に様々な問題が起きていますが、宗教者は、倫理的なもの、あるいは人間の生き方、自己実現の仕方を提示しようとしています。

日本の場合は、それを提示しなければならないのは仏教者であった。ところが残念なことに、その仏教が、江戸時代の檀家制度の中で、本来の宗教性を喪失してしまい、いわゆる「葬式仏教」と化してしまった。さらに、第二次世界大戦の時に、ほとんどの仏教教団が軍部に協力してしまいましたね。軍国主義に反対したのはキリスト教などです。それから創価学会も本来の仏教の平和主義にのっとって反対しましたが、仏教界全体からするとほんのわずかでした。教義まで変えていった教団もある。敗戦後、そのことが非常に大きなショックになって、その後、仏教者自身が人間の生き方、あるいは価値観・倫理観を説くことが出来なくなった。と言うよりも、国民が信用しなくなったんじゃないかなという感じがしますが。

佐和 そうなんでしょうね。地球環境問題を考える時に、やはりいまの問題が関わってくると思います。

今年の十二月に京都で地球温暖化会議が開かれます。

ここで先進国に対して、二〇〇〇年以降の二酸化炭素の排出量の削減の数値目標が決められることになっていきますね。先だつてのデンバー・サミットで、そのことについて先進七カ国が集まっていたいろいろな議論したわけですが、ヨーロッパは既にEUとして一五%削減という目標を提案しています。「自分たちは一五%削減する、だから、日本やアメリカも一五%削減すべきだ」と言っているのです。それに対して、アメリカと日本は、いたって消極的なんです。アメリカは、産業界の強烈な突き上げがあるからです。日本では産業界はそれほど突き上げていないのです。

地球環境問題に関わっているいろいろなことを注意深く観察していると、どうも日本人は地球環境の保全に対して消極的過ぎると思います。一方、ヨーロッパの国々は、いま申し上げましたとおり大変熱心です。特に、北欧三国、フィンランド、ノルウェー、スウェーデンと、デン

マークとオランダ、この五カ国は非常に環境に対して熱心な国です。

昔、『大国の興亡』という本を書いた大変有名なポール・ケネディという歴史家が、この五つの国に共通して言えることをあげています。彼は、次の二つの点を指摘した。一つは、環境に配慮するに足るだけ「豊か」であること。確かにこの五つの国はいずれも、さつき申し上げた一人当たりのGNPも十分高く、二万五千ドルから二万八千ドルという水準です。

そして二つ目が、環境問題についてきちんと発言出来る中産階級がいることです。これはどういうことかと言うと、教育水準が高いということですね。翻って、日本はどうでしょうか。これは一人当たりのGNPは四万ドルですから、圧倒的に豊かなわけですね。そして、教育水準はどうなのか。最近の統計によると、大学進学率はとうとう五〇%を超えて、これも世界一である。数字の上では教育水準も高いし、豊かでもある。にもかかわらず、環境問題に対してきちんと発言出来る中産階級は存在しないと言ってもいいかと思います。それはなぜ

なのか。答は明らかで、「本当は豊かではない」、「本当は教育水準が高くない」ということですね。本当に豊かでないということは、先ほどからも申し上げている通りです。本当は教育水準も高くないというのは、ただ大学進学率が高いというだけのこと。日本人の知的レベルは最近急速に低下してきていると思います。

では、なぜ、本当の意味での知識を身につけないのかと言うと、これはシステムとしての教育制度が悪いこともあるし、それから、さつきおっしゃった宗教というものがないということにも関連していると思います。

川田 いま北欧のお話がありました。北欧は平和の問題に対してはイニシアティブを取っています。いわゆる「大国」ではありませんが、平和とか、環境とかをリンクした形で地球全体の問題、人類全体の問題を考えていくという、そういう国々ですね。

佐和 そうですね。途上国に対するODAの援助は、GNPの〇・七%ですからね。日本は、GNPのサイズが大きいから金銭的には大きいけれども、パーセンテージで言うと、〇・三%ですから非常に低いわけです。

川田 それからNGOとか、ボランティアとか、盛んなところも大体北欧です。

佐和 そうですね。実際、国際政治の場での発言の重みは、恐らく、日本と、例えば、スウェーデンと比べると、スウェーデンの方が上ではないでしょうか。

川田 そうですね。発言に託された精神性の問題ですね。

山本 宗教が環境運動に影響を与えるとすれば、いままでの歴史を引っ張ってきたのがキリスト教文明であったという自覚が、ヨーロッパの人たちの中に根付いているからでしょうか。

川田 僕は、宗教性というか、倫理性が人々の心に生きているからなんだと思います。日本の場合は、土着の民族的なものは習慣として残っていますけれども、本当の宗教性——それが人間の生き方とか、倫理・道徳の「核」となるという形では、人々の心の中から消失してしまっている。環境問題で言えば、自然との共存の生き方は仏教や東洋の宗教の中核にあったものですね。そこから、もったいないというような倫理性も出てきた。仏

教的に言えば「足るを知る」ということですね。

北欧の人もそうですし、キリスト教圏には宗教のもたらし精神性、倫理性はごくまれている。そうすると、やはり地球全体、環境の問題とか、あるいは平和の問題、核の問題に対する意識が啓発される。

それから、人間の生き方自体が、精神的な高さで生きようとしている。倫理性をもった生き方を追求しようとしている。それが、本当の人間の豊かさなんですね。

佐和 さっき、ハンチントンが六つの文明圏に分けたと言いましたが、その一つである儒教文明圏には、韓国、北朝鮮、そして中国、場合によっては華人と呼ばれる人々がいますので、ベトナムからASEAN諸国まで、入るかと思えます。

ちよつと話が逸れますが、マックス・ウェーバーが、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の中で言う「資本主義の精神」とは、別に私利私欲を追求するなんて言っているのではなく、これは勤勉なんですね。そして、勤勉こそがまさに資本主義の精神なんだと言っているわけです。

教では利他性の精神で経済活動の目的を私利私欲ではなくて、他の人のために、他者を豊かにしていくために行うとしているのです。

明治期から大正期にかけて、戦後にも残っていたと思いますが、やはり儒教と仏教の倫理が日本の経済をその精神的側面から支えていた。特に、経営者の倫理性を支えていたと思うのです。一般に仏教と言うとどこかで瞑想するとか、座禅を組むとか、社会と離れたところにあるように考えられますが、もともと仏教は、社会の中において人々に奉仕する宗教なんです。

佐和 なるほど、なるほど。

川田 仏教倫理と儒教倫理によって培われる職業倫理の柱は「勤勉」と「貯蓄」ですが、江戸時代の商人は、これを実践したとされています。明治に入って、例えば「住友」の創始者（政友）の中に仏教精神が生きているという例もありますね。

倫理性の喪失とバブル経済期

山本 日本人の倫理性が失われてきたのはなぜですか

儒教文明圏の話に戻りますが、儒教倫理というのは、勤勉ということを通じて資本主義の精神、あるいはプロテスタンティズムの倫理とかなり近いところがあると思います。日本も儒教国だと思っている人がいるかもしれない。いわゆる武士道という形では儒教倫理は確かにこの国にもあったわけですからね。ところが、それもいつの間にかどこかに置き去りにしてきたということです。

川田 そうですね。日本の経済について言いますと、明治に入ってからある程度の期間はその中に儒教倫理とか、仏教倫理は生きていたように思います。勤勉とか、別の言葉で言うと「利他性」みたいなものです。日本人の心は、主として、儒教倫理と仏教倫理によって培われてきましたが、プロテスタントの倫理と儒教倫理の類似性については、いま先生がおっしゃった通りです。ところが、原始仏教から既に説かれている職業倫理観は、ウェーバーの示す資本主義の精神と著しく類似しているのです。ロバート・N・ベラーなども指摘するところですね。原始仏典のうちには、繰り返し、勤勉に生業に従事して、財を集積することをすすめています。さらに、仏

ね。

佐和 自分の子供の頃を振り返っても、例えば、電車やバスで席に座っている時に、お年寄りが乗ってくれば譲るのは当たり前だと思っていました。お年寄りが乗って来られた時に、「さあ、どうぞ」と席を立てて譲るのは恥ずかしい。だから、次の駅で降りるような顔して席を立つなんて（笑い）、そういう経験がありますよね。ところが、最近の子供は、とにかく、そんなことは全く考えようとしません。

いつから、そういう小さな倫理感を失ってしまったのかとつらつら考えてみると、やはり、あのバブルの時です。バブル経済というのは一九八七年から九〇年にかけての四年間で、この期間を「バブル経済期」と呼んでいます。私は、さらにそれを「倫理的空白期」と呼ぶことにしています。

最近いろいろ問題にされている官僚の不祥事がありますね。よく官僚は優秀だと言うじゃないですか。本当に優秀かどうかは知らないけれども、普通の常識からすれば、優秀な人間ほど倫理的にも優れているはずですが、

彼らは、あれほどひどいことを平気でやっている。

そして最近、野村証券あるいは第一勧業銀行の事件から伺い知れるように、経済界の人たちもとんでもないほど倫理観が麻痺している。一体いつ頃から倫理が麻痺したのかというと、私は、いまから十年前のバブル経済だと思うんですね。

さつき、ウェーバーの資本主義の精神について申し上げましたが、私利私欲を追求する、私利私欲の追求を正当化するのがまさに資本主義の精神だと誤解される面があります。そして、そういうことが最もあからさまになったのがバブル経済の時です。

もともと日本人には、お金のことをいつも口にするのは卑しいことである、という倫理観がありましたよね。ところが、あの時は「マネーの時代」とか言って、「マネー、マネー」と、金のことを「マネー」と言いかえれば、それを白昼堂々と口にすることが別段恥ずかしくないような時代でした。あの時に日本人の倫理観は大きく変わってしまったと思うのですが、いかがでしょうか。

川田 いま、おっしゃった倫理的なものを家庭で躾ける

供も「はい」と言って立ちます。席が全部埋まっていたわけではむろんないのですが。そうした躾けを、日本ではいつの頃からか全くなりませんでした。

川田 そうなんですよ。僕らの時代は、まだ、家庭で躾けられましたよね。やはり、バブル期ぐらいからですかね。大人自身が倫理性をなくしてきましたから。

佐和 そして、いまから十年ほど前から、学校でもいわゆる偏差値教育と言われ始め、極端に学校教育も偏ってしまっただけですね。

東アジア世界の経済と倫理

山本 佐和先生が、この間、朝日新聞（一九九七・六・三〇）に書かれていましたが、華人経済圏あるいはインドといったような所が人口が合わせて二十億人近くいる。そこがいま、経済的にもすごく成長している。その成長の仕方は、かつての日本の成長に類似している部分もあるように思いますが。

川田 華人経済圏、いわゆる中国などの儒教圏ですね。その辺りでは、儒教にはぐくまれた倫理性は、まだ生き

とか、教えるとかということをしなくなりましたね。特別にお母さん、まあ、お父さんもそうですけども（笑い）。若い人の倫理性が失われてきていますね。

これまで、家庭で人間としての倫理性を躾けてきたのも、日本の場合は、やはり儒教と仏教の心が基盤になっていたと思います。

佐和 おっしゃる通り、ヨーロッパとかアメリカでは、まさにキリスト教に根差す倫理と言いますか、そういう教育は確かに家庭内でもよく行われています。

非常に印象的だったのは、一九八八年だったと思いますが、イギリスのスコットランドに行ったのですが、スコットランドですからウイスキーの博物館みたいなところがありました。そこへ足を運んでみると、ウイスキーの歴史の映画を観てくれる部屋がありました。そこで映画を観ていたら、かなり年配の方が、小学生ぐらいの孫を連れて来ました。当然、椅子が用意してあります。その子供がずっとその椅子に座ろうとしたら、年配の女性の子供を叱っていました。「これはお年寄りのための席なんだよ、お前は座るんじゃない」と。もちろん、子

ていますか。

佐和 生きていると思いますね。さつき、日本の工業化の傾斜が欧米諸国に比べて急だったと言いました。いまの東アジアでは、もっと急です。ですから、日本と同じような倫理的な退廃のようなものが起こる可能性はある。それだけに、彼らがもっている一つの儒教倫理というアイデンティティーのようなものが、どこまで倫理的な退廃を防ぐことが出来るのか、これは、一つの歴史的な実験として注意深く見守っていく必要があると思います。

川田 中国の場合も、官僚の腐敗とかいろいろ言われていますが、全体的には儒教倫理が、まだ個人の中には生きているのではないかな、という気がします。

インドの場合も、いわゆるガンジー主義の精神が生きていますが、いまは国民会議派自体の影響力が落ちてきていて、むしろ、ヒンズー教それ自体が大きな力をもってきています。しかし、ガンジーの思想と行動の源泉にもヒンズー教があったことを考えると、インド民族をはぐくんだ精神性、倫理性は存続していると思います。

「共存じのように、ヒンズー教は、自然との共存を非常に大事にします。カーストには、種々の問題が指摘されていますが、ヒンズー教に基づく宗教的、倫理的な生き方が、物質的なものだけに突っ走らないという歯止めになることが期待されます。それから、家族を非常に大事にします。そういう面でも、倫理的な規制が効いてくるのではないかと考えています。」

ただ、インドの場合も、イスラム教とも関係しますが、問題なのは、いわゆる宗教間紛争ではないでしょうか。ハンチントンも言っていますが、今後はむしろ一番大きな問題として、出てくるのではないかと思います。

社会制度と倫理

山本 倫理性の喪失をある意味で補っていくのが社会制度ではないかと思いますが、日本社会の場合、その社会制度の方はどうでしょうか。

佐和 さつき申し上げた一九八〇年代後半のバブルの時代は「マネーの時代」とも言われた。長谷川慶太郎さんという経済評論家が、八七年に『投機の時代』という本

を書いておられます。何と書いてあるかというと、「汗水垂らして金儲けをする時代はもう終わった。これから頭を使って、投機で金儲けをする時代がやってきた。いま時、投機をやらない人は世捨て人だ」と書いてあるんですね。大変印象に残っています。

そして、若者の製造業離れ、特に理工系学生の製造業離れ、金融業傾斜ということが言われたのも一九八七年から八八年頃ですね。数字で申し上げると、七〇年に東京圏の国公立大学の理工系学部を卒業して、金融業に就職する学生の比率は、わずか一%だったんですね。ところが八八年には、何とその数字が二五%になって、四人に一人が金融業に就職した。これで理工系学生の製造業離れ、金融業傾斜が言われるようになったのです。

振り返ってみますと、一九六〇年代、あるいは七〇年代の初め頃までは、ライフスタイルの美意識と言うと大げさですが、どのような仕事をするのがカッコいいかと言うと、まさに「黒部の太陽」だったんですね。つまり、土木工事の現場で働くことは非常に男らしくてカッコいい。ところが、八〇年代の半ば過ぎになりますと、

ホワイトカラーでブランド物のネクタイをして、パソコンの画面の前で金融のデイトリングとかをやる、それが非常にカッコいいと、ライフスタイルの美意識みたいなものが大きく変わってしまった。

別に、金融業が悪いと言うわけではありませんが、金融というのはあくまで賭場なんですね。本来、賭場にはルールがきちんとあり、ルール違反は厳罰に処していく。そうしたルールが運用されて、初めて金融という賭場は円滑に機能し得るのですね。

ところが、日本ではそのルールが明示化されていない。また、ルール違反を厳罰に処することがない国なんですね。本来なら、経済の中心が製造業から金融にシフトすることに対して、ルールとルール違反の罰則の明示化が、もつとはつきりとした形で行われなければいけなかった。

そして、一九九一年に証券不祥事がありました。その時に、日本にもアメリカのような証券取引委員会のような中立的な監視機関の設立が提案されました。しかし、大蔵省が抵抗したんですね。アメリカの証券取引監視委

員会、これは千四百人から千五百人の職員を雇っているんです。そんなことをするのは、行政改革の流れに逆行すると言うんですね。そして、大蔵省付属の証券取引等監視委員会をつくるということで、お茶を濁してしまっただ。

私はその頃、それは盗人に十手を持たせるようなものであって、あくまで監視機関は中立的でなくてはいいかと主張したんです。ところが、常にそういう形でお茶を濁してしまうのです。いま、「行政改革、行政改革」と言っていますが、一番重要なことは、やはり行政の中に中立的な監視機関を置くことです。それが本当の行政改革になるのです。そのことを主張しますと、返ってくる答えはいつも決まっています。

税金に関して言うと、トウゴサン（二〇・五・三）とか、クロヨン（九・六・四）という言葉に象徴されるように、職種によって所得の捕捉率が非常に低いという実態があります。だから、私は大蔵省の役人に、「なんでもっと所得の捕捉率を上げないのか」と言うんですね。そしたら、老いも若きも……、これはマニユアルがある

んですね、必ず同じ答えが返ってくる。どういう答えが返ってくるかと言うと、「そんなことしたら、徴税コストがかかり過ぎる」という答えが返ってきます。

私に言わせれば、税金も証券市場も銀行もすべて、金融検査も全部、中立の監視機関を置くべきです。いくら金がかかってもいいではないですか。公正な市場経済がつくれたら、いくら金がかかってもいいではないか、と言っているのです。

山本 ルールが日本ではあまり機能しないとか、中立的な機関がうまく機能しないのは、やはり日本人のもっている宗教性、例えば外在的な神がない、といったことに関わってくるような気がします。

川田 一つは、法とか、ルールというものの、これを重んじるような社会は、やはり基本的にはキリスト教社会から出てきたんだと思います。

神との契約というところから、人と人との契約という形に入って、そこからいわゆる一神教におけるような倫理性が出てきた。法の体制、経済体制、政治体制の中に、契約の精神が貫かれている。

やったように平気でルールを無視してしまう。そして、これまでの内発的倫理性を重んじる精神土壌からいって、契約のルールを明示化するということに対する抵抗みたいなものが出てきているのではないかと思います。佐和 戦後、日本経済は脅威的な成長をしたのですが、戦後間もない頃には、例えば、ソニーとか、ホンダとか、京セラとかといった町工場が、いつの間にかハイテク企業に衣替えした。そんな例がこの国は幾つもあったわけです。そうした町工場をつくった戦後の経営者たち、そして、そこで働く人たちは、まさしくさつき申し上げたマックス・ウェーバーの言う近代資本主義の倫理、資本主義の精神のもち主だった。ところが、バブルの時には、実はあの時は、近代資本主義の精神ではなくて、まさにカジノ資本主義の精神みたいなものが跳梁跋扈し始めたということですね。

経済の重点なるものが、物づくり、製造業から金融の方にシフトしてきた。ところが、金融の世界では、監視機関なるものが存在しないで、経済に関わる面での倫理観を埋没させてしまうのではないかなと思います。

そういう面から言うと、東洋には一神教の宗教の伝統はありません。だから、東洋においては、神との契約という形での契約の精神は出てこないですね。東洋では、むしろ、そういう倫理規制をしていたのは、儒教や仏教の宗教でした。儒教で言う仁・義・礼・智・信の倫理性とか、これに対比するものとしての仏教の五戒などです。この五戒は、項目としては、モーゼの十戒とも共通しているのですが、神との契約ではなく、むしろ、自身の中にある煩惱や欲望を内面的にコントロールすることによって出てくるものです。

ところが、儒教や仏教の力そのものがなくなってくると倫理規制も失われてしまった。例えば、正直であるとか、信頼心をもつとか、仁や慈悲で他者に対していくとかの倫理性ですね。

そうすると、契約の精神でルールを定めて物事を進めていくという体制を西洋から輸入してきても、キリスト教的な倫理観そのものを受け入れたわけではない。その体制を儒教や仏教倫理が人々の内面から支えればいいのですが、それがなくなってしまったから、先生のおっし

川田 住友には、創立以来、仏教精神が生かされていたことは、先ほど紹介しましたが、ソニーの小林茂さんや、土光さんにも仏教の精神が生きていましたね。松下幸之助さんにも宗教的なものが生きていました。ところが、何代目かになると、その精神性が失われていく。

「メタボリズム文明」の創造に向けて

山本 先生は「メタボリズム文明」ということをおっしゃっています。これは適正消費、極小廃棄、省エネルギー、リサイクル、製品寿命の長期化、こういう内容を骨格として二十一世紀型の文明をつくり上げていってはどうか、という提案だと思えますが、これをどこから始めていくかですね。

いままでのお話では、倫理性とかルールが日本にはない。となると、日本の中で「メタボリズム文明」の創造が本当に可能なかどうか、かなり気になります。

佐和 その可能性はさて置くとして、さつきも、地球環境問題は我々に何を問いかけているのかと言うと、それ

は大量生産、大量消費、大量廃棄の二十世紀型工業文明の見直しだ、と申しました。

そして、大量生産、大量消費の文明は、今世紀と言いますか、一九一〇年代から二〇年代にかけて、アメリカで形づくられた。その後に「大量廃棄」という四文字をくつつけたのは戦後の日本だったのではないかと申し上げました。だからこそ、私たちはメタボリズム文明を構築する責任があるのではないか、と思います。

と同時に、新文明構築へ日本がイニシアチブを取っていくことです。ところが、国際政治の場で、この日本の国はあまり強い発言力もない。なぜかと言うと、やはり国の品格を欠いているからです。では、この品格を身につけるためにはどうすればいいのか。日本はだんだん金が無くなってきたとは言え、まだ依然として金満大国であることは事実です。その金をどういうところに使うのか。地球的問題群の対策に金も投入し、世界のリーダーシップを取る。そして、さすがに日本はいいことをやる、と評価も高まり、国に、それなりの品格が備わってくる。そうなれば、発言力がついてくると思います。

いるのかどうか、という判別ができるわけです。そういう基本精神なり理念がきちんとあって、総合的に判断していく行動のなかに、国なり民族なりの品格が備わってくるのではないかと思うのが一つです。

それからもう一つは、住民運動や市民運動、それにNGOを民衆の側から強めていくことが、大きなポイントではないかと思っています。北欧三国でもそうですし、アメリカでもそうなんですけれども、地方自治体の活動も活発ですし、いわゆるNGOの力が非常に強いですね。人権や環境・平和に関わるNGOの運動が非常に大きな力をもっています。日本の場合は、ようやく住民運動が展開されるようになった段階です。

佐和 私の言い方をすれば、この国ではまさに市民社会が未成熟だということだと思います。では一体、市民社会ではなくて何社会なのかと言うと、企業社会だったんですね。日本の男性の帰属集団は、昔だったら「村」というのがあったんですね。

ところが、それがそのうちに、帰属集団が会社になっちゃった。自分は必ずどこかに住んでいるのですが、

ね。

よく、こんなことを言う人もいます。「日本という国は、あれは金銭自動引き出し機だ。とにかく金を持っている」と。だから、各国の首脳が日本を訪問する。要するに、金をもらいに来るんですね。叩けば必ず金が出る。そこには、原則も何もない。例えば、人権を侵害しているところとか、環境破壊をするようなことには金を出さない。そういうケジメが日本にはないでしょう。

川田 精神的な原則性を失っているんですね。これは何ですか、政治家の問題ですか（笑い）。普通、官僚だと言われますが、政治家自体の問題でもあるかなと思いますけどね。

佐和 まさに理念なき経済大国ですね。

川田 だから、精神性に基づくきちんとした理念をもつことが大切ですね。そこから出てくる精神的指針がある、と、人権や環境への方向付けができる。それから、その金をどう使うのか、軍事の方には使わないとか、また、その金が民衆のところに行くような、システムになっ

て、その地域社会に対する帰属意識は全くない。では、地域社会に対する帰属意識はどういう時に、何がきっかけになって芽生えるのか考えてみますと、例えば、自分の住んでいる地域にごみ焼却所が出来るとか、あるいは、高速道路が出来るとか、あるいは、風俗的なものが出て来るとい時に、初めて地域社会に対する帰属意識が芽生える。そして、反対運動をするわけですね。

そういう、実際の生活環境と言いますが、それを守ることを通じて、初めて市民社会に対する帰属意識が出てくるのではないかと思います。ただ日本人は、自分の住んでいる場所にそういうものが出来る、迷惑なものが出て来ると反対する。ところが、何キロか離れた別の町に出来る、と、無関心になってしまふ。

川田 そうなんです、そのところですね。住民運動や市民運動の核は、いまは大体女性になってきていますね。

佐和 ええ。

川田 やはり生活感覚というのは女性なんです。女性の方が、感覚的にものごとの本質を見抜く洞察力は強い

ですね。男性の場合は、大体まだ企業とか、会社とかに比重がかかっていますからね。女性の場合は、働いていても子供を育てなければいけない関係から、地域に密着している。そこで、いろいろな発言をしたり、運動を起こしたりする。おのずと女性が中心になってくるのではないですか。

それと、もう一つは、男性もそうですけれども、女性の場合にも、やはり自分の関わる範囲だけで、そこからもう少し遠い所で起きている問題とか、あるいは子孫のこととかにまで視野が及ばないですね。その辺りの視野の広い考え方の教育を行う場所は、一つは家庭であり、もう一つは学校ではないかと思えますね。

佐和　ですから、いま、地球環境問題への関心が、徐々にはあるが確実に高まりつつある。その環境問題に対する関心の高まりを通じて、この国に市民社会というのが根付けば大変いいことだと期待しているのです。

川田　そうですね。そうすると、政治家の質も変わってくるんじゃないですか。

佐和　そうですね。

たものを試験問題にして、これを判断するのは難しいです。すよね。

佐和　理科の実験ですら、受験勉強のためには実験なんかやっている暇がないとか言ってやらないくらいです。から。いわんや、体験なんていうのはね。

川田　大学もそうですが、むしろ、企業のあり方自体の問題じゃないですか。企業がどういう人材を採るか、どういう体験をした人を重要視するかということに集約されるような感じですよ。企業の人材観が変わってくると、大学もそうした目で学生を見るでしょうし、学校教育にも反映されていくと思います。もう少し言うと、いわゆる企業倫理の問題が、特に、日本の場合には重要という感じがします。

佐和　そして、企業に、環境に対する関心をもってもらうためにはどうすればいいかと言うと、それは消費者の判断なんです。例えば、ある人が二百万円の予算で車を買おうとします。ABCDEの五社の車を見てみると、機能や性能の面ではほとんど差がない。デザインも似ている。ある消費者はA社の自動車を買った。その時に、

山本　日本の場合、学校教育の場では環境教育という分野がありますが、導入が非常に遅いですね。アメリカなんか一九七〇年代の初めに導入しています。日本は文部省が公的に訴え始めたのは、やっと最近です。

佐和　ところが、これも傑作な話ですが、日本ではエネルギーや環境のことを学校で教えない。この辺が問題である、とある人が言ったんです。ところが、それを聞いた人が、高校の教科書を見てみたらちゃんと書いてあると言ってますよ。

では、教育の現場でそういうことを教えているのかと言うと、実は教えていない。なぜ、教えないのか。入学試験に出ないからと（笑い）。

山本　問題を作りづらいんですね、感性の問題も重要になってきますから。記述式ならいいんでしょうが、その場合でも評価は難しいでしょうね。

川田　そうですね。やはり、体験が中心になってくるでしょう。特に、自然の中での生きまのとの体験生活とか、他の民族文化との触れ合いなどとなってきますと、体験を通じて感じ取っていくことになる。そういう体験をし

「あなたはなぜA社の車を買ったのですか」と聞いたら、次のような答が返ってくることを期待したいですね。

「私は、A社が環境に対してこんな配慮をしている。だから、A社の製品を買った」と。

つまり、車を買うときは、環境に対する配慮を性能の一部としてカウントして選ぶ。それが、成熟化社会の消費者だと思っています。

もともと企業というのは、まさに利潤を追求する主体です。それはそれがかまわない。ところが、消費者が賢明な選択をしていけば、利潤の追求と、環境に対する配慮が矛盾しなくなります。公害を出さない車でなければ売れないとなれば、環境に配慮することが利潤を追求することにもなる。それには消費者が変わることだと思います。

川田　消費者の意識と言うと、消費者のライフスタイルの問題ですね。この人生を、どういう生き方をしていくか、物質的欲望のみの追求で終わるのか、他の人々との精神的交わりを大切にするのか、自然とどう付き合うのか、といった生き方です。消費者自体が、環境とか平和

とか人権とかに目配りをした、そういうところで企業とか製品とかを選択していくという意識変革と、本人自身の生き方の問題——これが変わっていくというのがやはり基盤でしょう。実はそこに、直接的に力をもつのが宗教なり道徳なんです。

山本 日本人の場合は、視野がとにかく狭いですね。空間的にも、時間的にも狭い。しかも、価値の評価軸が非常に単純ではないかと思えます。これも特に日本人には大きな課題ではないかという気がします。

佐和 そうなんです、ほんとに空間的な視野も狭いし、それから時間的な視野も短いですね。

山本 それは島国だからですか(笑)。

佐和 空間的には島国ですね。だから、時間的な視野が短いんでしょうかね。

川田 これは、いままでの日本の歴史をずっと見ますと、ほとんど東アジアの中心は中国でしょう。日本は、中国から次から次へと文明なり、宗教なり、文化を全部輸入してきて、それを自分なりに消化してきた。そして、最近になったら西洋からも入れてきた。外からの輸入。

入に集中していたのではないですか。自分で視野を広くして、そうして次のことを考えるよりも、一番最近のものを全部入れてくるという、そういう歴史の連続だったという気がします。

ようやくいま、そういう学べきものと言うか、そういう先端のものを、大体全部吸収し尽くしたところに入ってきて、次に、それではどうするかというと、今度は、自分自身で創出していかなければならないところに追い込まれてきた。その時に、視野の広さが重要になってくるのではないかと思います。

独自性の創出の基盤になるのが文化であり、宗教とか哲学なんですけれども。それが西洋圏においてはキリスト教であつたし、それから今後どうなるかわかりませんが、やはりイスラム教の方にもそういう精神性がありますしね。日本人はもう一度、宗教的・精神的なものを再発掘していく時期にきていると感じますね。

佐和 最初に申し上げたように日本は無宗教国です。だからと言って、日本人がこれから何か宗教をもつ、本来の狭い意味での宗教というものをもつことは無理でしょう。

う。

川田 そうですね。世界、人類へと通じゆく「宗教的なもの」、精神性、倫理性の発信ができればと思いますね。

佐和 さっきも申し上げた通り、丸山真男は戦前には国体が非宗教的宗教の役割を果たしていたと言っています。が、私も全くその通りだと思いますね。

そして、戦後は「追い付き追い越せ」が、非宗教的宗教の役割を果たしてきた。だからこそ、日本人はそれなりにアイデンティティーをもち得たし、それなりに働きましたわけですね。ところが、「追い付き追い越せ」の目標は、とうとう達成されてしまった。そこで、「追い付き追い越せ」が非宗教的宗教の役割を果たし得なくなりました。

では、次に一体どうやって非宗教的宗教を見出すのかということ、いまは私たちが、政治家も経営者も、あるいは知識人も、そして誰もがまさに途方に暮れている状況です。

川田 そうですね。

山本 それでは時間になりました。どうもありがとうございました。

(ざわ つかみつ・京都大学経済研究所所長)

(かわだ よういち・東洋哲学研究所所長)

(やまもと しゅういち・創価大学教授)